



社団法人

海外と文化を交流する会

(社) 海外と文化を交流する会会報

2005年10月発行(3ヵ月1回発行)

第28号

”知と心”の繋がりに文化の原点を求めて

日本を理解し日本で学ぶ留学生への支援 貧しい国々での医療活動を支援 各国大使館との協力などによる文化講演会の主催

巻頭詩

一つぶよ

まど・みちお (詩人・児童文学者)

まど・みちお：明治42年山口県生まれ。台北工業卒。国際的な評価も高く、「アンデルセン賞」その他数多くの賞を受賞。著書に「ぞうさん」(ぞうさん ぞうさん お鼻が長いね.....)や、「まど・みちお詩集」「宇宙のうた」ほか多数。動物に関する詩20編は美智子皇后が英訳するなどで、話題になりました。掲載の詩は、作者の快諾を得て転載しています。

ぼくらの まえへと つづき
そして うしろへと つづく
えいえんの じかん

ぼくらの そとがわへと ひろがり
そして うちがわへと ちぢまる
むげんの うちゅう

きりがない はてがない さいげんがない
どこまでも どこまでも どこまでも
の なかの ぼくらよ 一つぶよ

と おもうことだけは でき
それだけしか できないのだとしても
その それだけよ 一つぶよ



まど・みちお少年詩集「しゃっくりうた」理論社より カット/松岡裕子

寄稿

日本の美を学ぼう

大谷俊介（社団法人・海外と文化を交流する会常務理事・会長代行）

日本の美を意識しはじめた。これはだれでも歳をとるとそうなるようだが、私の場合はそれに加えて来年 11 月にメルボルンで開かれる予定の「現代日本画展」に関係するようになったからである。

1977 年に当会の創立者の故松岡朝女史が音頭をとり、25 人の日本画巨匠に依頼して描いてもらった絵を 25 点オーストラリアに寄贈した（なぜオーストラリアなのかは別の機会に考えたい）。この当会最初の大事業は松岡女史の献身振りを含めて当時センセーショナルな話題となったが、その後のケアが悪く、この 25 点の日本画は当初展示されていたメルボルンのナショナル・ギャラリーから引き上げられ、少し粗末な扱いの憂き目を見ることになり 20 年以上が経過した。これを大いに憂いていた朝女史のご息女、松岡裕子専務理事が何とかしようと言い出してかれこれ 3 年になる。

運良く来年 2006 年は日豪交流年に指定され、両国間で文化交流が活発に行われることとなった。そこで当会としてこの活動に参加し、寄贈した 25 点の日本画を再びメルボルンで展覧する計画を立てることにしたのである。そしてその計画立案の係の一人として私も加わった。

私は、これまでの「がさつ」な暮らしの中で日本画を見る機会はほとんどなかった。日本画がどういうものであるかを詳しく知ることなく過ごしてきた。しかし、日本画の展覧会を開く関係者の一人としてこのままではいけない。日本画のことを少しは勉強し、オーストラリアの人たちにその蘊蓄のひとつづらいを語らねばならない。

日本画の画材や作画技法などは調べれば知ることができる。しかし、日本画の真の美しさの特徴を理解することはそう簡単なことではない。そのためには多くの美術品を見て、詩歌も読みながら、日本人の美的感覚の特徴を知り、日本的な美とは何かを意識して暮さねばならぬ。

あとでも述べるが、日本の美と私個人の生業でもある、西洋で育った厳密さを旨とする自然科学とは対極的な関係にある。そして、私自身まだ現役の労働者として忙しく、日々即物的に暮している。当然、美の勉強の進みは遅い。

以下は最近になり日本の美を探しはじめた私の初心者としての感想の一部である。

日本人の美的センスの特徴は外国人にきくといろいろと判ることがある。大抵の外国人はデパートに連れていくと、店員が買いものした品をばか丁寧に、しかもきれいに紙で包装するのにまず驚く。そして、その美しい振舞に感心しながらも、少し心配そうに「急いでいる時はどうするのか」などと訊く。日本料理屋に連れていった場合には一層びっくりする。塗りの見事

な机や座蒲団の配色、食器や醤油差し、楊子入れにいたるまでのすべての美しさに感嘆の声をあげる。そして、配膳される料理一品一品の盛り付けのきれいな様子に声も出なくなる。ただし、きれいで上品、かつ味の良いオードブルみたいなものが次から次へと沢山出てきたあとに、ムニエルやステーキなどに類したメインディッシュなしでご飯とお椀、香のものと果物が出て終りになるというような何か物足りない不満は本音のところ少しはあるようだ。そして、折角大きなお皿なのだから、あんなにも美味しいものを中央に少しだけでなく、余すところなく沢山置いてもらいたい、と密かに想ってもいるようだ。しかし、食事の席全体の芸術的とも言える美的センスをだれもが賞賛することはまちがいない。

これは何も高級料理屋に限ったことではなく、街の小料理屋を訪ねて白木のカウンターの前に座って回りを見渡しても、板前の動き、調理器具などすべて、簡素ながら調和のとれた凛とした美しさに皆びっくりする。

旅に出て地方都市の質素で小さな日本旅館に泊ると、粗末な部屋に見えるが、明かりの採り入れも美しく、そこには必ず床の間があり、きれいな器の一輪挿しに季節の花が飾ってあり、やはり日本独特の美的センスが見てとれる。皆ちょっとしたカルチャーショックを受けるようだ。

私たち日本人にとっては気が付かずに見過ごしてしまうような、生活の中の小さなひとつひとつが外国人にとって、もの珍しく、しかもどれもが日本人の美意識の高さを感じさせるようである。例えば、春には萌え出る若葉を愛で、花見に行き散る花を惜しみ、夏には暑さをひっそりと我慢し、来客があると玄関前を掃除、打ち水をし、秋には紅葉狩りに行き、滅びゆく美を慈しむ、といった四季の移ろいに美を感じようとする庶民の暮しの何気ないひとコマに鋭く目を光らせる。日本の美や文化の特徴がどこにあるかは、親日的な外国人から学ぶのが良いと言われる所以である。

それなのに、日本の文化は世界の中でも独特だから外国人にはとても判るまい、と想っている一種の島国根性から来る悲しい偏見もあるようだ。あの故エドウィン・ライシャワー氏に日本の歴史を講釈しようとしたヤカラもいたらしい。ドナルド・キーン氏に「あなた、日本の俳句がわかりますか」と訊く愚者もいると聞く。彼らはもちろん並の日本人よりずっと日本文化を正しく理解している賢人だ。私も良く知っている故リチャード・ストーリー氏は小樽高商の外国人教師を勤め、オックスフォード大学に戻ってからそこで日本(東洋)文化センターを創設した親日家であり、もちろん日本の社会、文化に詳しい。彼から以前、仏像における日、中、韓の違いに関する意見をきいた憶えがある。日本に渡ってきた仏像が、7、8世紀頃から練りに練られた末に宗教色を越えて芸術性の高いものとなったことを彼は見事に見抜いていたようだ。そして、日本語の独特の曖昧さが日本文化と美意識の隔々にまで影響を与えていることを知っていた。

日本語にはものを示す時の単数と複数、そしてそれを限定(例えば a と the)する区別がない。主語を省くことも普通である。これは前述のように自然科学の発展には極めて具合が悪いが、情緒を育む面から日本人の感性にぴたりとはまる。吉田兼好も「徒然草」で「すべて、ことのととのほりたるはあしき事なり、しのこしたるを...面白く生き延ぶるわざなり」と言っている。何事も、きちんとしていないほうが良い、不完全で乱れて見えるぐらいが良い、と

言うのだ。この曖昧さが日本の美に余情、余韻を加え、不規則で非対称な美しさを生み出しているのではないか。京都竜安寺の石庭はヴェルサイユやアルハンブラ宮殿の庭とはまったく趣きが違ふし、中国、韓国にも見ない不統一な美しさに満ちている。日本画の逸品を見ると余白の部分が多いのに驚くことがありそれが余韻となっている。そして、少しの色使いで見事な表現を成している。舞台芸術として能とオペラの違いは明白である。日本の美の多くは口説で言えば饒舌とは正反対の寡黙をもって良しとするところがある。これは外国人の目にどのように映るのであろうか。私がいきつけの小料理屋に行ってもいちいち驚いたりしないように、この日本の美をもたらし独特の感性は、並の日本人はあたり前のこととして意識することはなく、水の味のように刺激も与えないが、むしろ外国人の感受性には強く訴えかけるものがあるようだ。

そこで、私は日本の美を学ぶに当たってとりあえずの入門として、多くの外国人がそれぞれ感じたところを調べ、それをこれから探っていこうと考えている。これは、異なる視点からの日本観を知ることができる上に、日本の美に対して国粋主義的な見方に陥らずにすむ良い方法であらう。

追 悼

伊藤英子理事を偲んで

松岡裕子（社団法人・海外と文化を交流する会専務理事）

伊藤英子理事のプロフィール

1921年千葉の藩主の家柄で、当時横浜正金銀行ロンドン支店長の父、加納九朗子爵(後に千葉県知事)の次女としてロンドンに生まれる。39年英国最後のコートで社交界にデビュー。40年伊藤英吉氏(伊藤忠商事元会長)と結婚し神戸へ。79年ボランティアの功労でエリザベス女王よりC.B.E勲章授与。六甲カトリック教会会員。2005年9月20日永眠。(注)「日本の貴婦人」 稲木紫織著・光文社・知恵の森文庫より参照

「代わりの理事を推薦するなら、関西にお暮らしでボランティアに熱心な『ローザ』以外は考えられない」と熱海の病院にお訪ねした心細そうな私に、伊集院功子理事は言われたのでした。今から16年前のことです。

「ローザって日本の方なのかな～」と思いつつも、早速その方宛に理事打診の手紙を書きました。御影にお住まいの日本名、伊藤英子(ヒデコ)さんから直ぐに返事が来ました。答えは「no」でした。ところがその余りにもチャーミングな文面にすっかり魅了されてしまった私は、その事を書いて送ったのがきっかけとなり、文通による交際が始まりました。

ある日のこと、「応援している日本テレマン協会の定期演奏会が上野文化会館であり、同行

するので会いたい」との便り。二世の様な方かなと想像しながら待ち合わせの場所へと急ぎました。小ホールへのスロープの所に、すらりと立っておられたご婦人を見てびっくり。その方は上品な白髪交じりのまさに日本の貴婦人だったのです。

その後、ご夫妻を中心に親しいご友人達との17日間、英国・北欧巡りのツアーのお誘いを受け、お互いの自己紹介にもなるよい機会だと思って、知らない方ばかりの一行に飛び入りでお供する事になりました。

旅行から戻ったある日、「日本テレマン協会の“ヨハネ受難曲”を東京の某教会で出来るよう力を貸して欲しい」旨を言ってこられました。この公演に当会が協力した事から、長い道のりを経て、漸く英子さんは理事に就任なさったのでした。

神戸と東京と離れていても、英子さんは伊集院理事亡き後、しっかりと私の心の支えになってくださいました。その視野の広さ、適切なアドバイスと決断力には心底感服いたしました。困難な時期にあった私には、「毅然としていなさい」と喝を入れてもくださいました。離婚問題から遺産相続、はては神父様の身の上相談や病院、老人ホームの定期的ご奉仕とご支援と、一旦引き受けたことは責任を持って心血を注がれる方でした。

英子さんのこの無類の人に対する思いやり、責任感、実行力、我慢強さは一体どこから来るのでしょうか。英国で幸せにお暮らしの時に、母上が13歳の英子さんの目の前で突然心臓発作でなくなられたということです。以後、女主人となって家事の一切を任せられ、ご多忙な父上のよきホステス役を見事に果たされたそうです。

四つの癌の手術をされましたが、告知されると「家族や友人でなく、自分でよかった」と語っておられます。「入院中のお見舞いやカードにも一つ一つお礼状を書くので十分な静養にならないから、今度の入院は誰方にもお知らせしていないのです」と3回目の時、病院で仰ったお嬢様の言葉に英子さんのお人柄が又一つうかがえました。

ところが昨年はクリスマスカード(毎年600通は出しておられた)が届かなかったので、多分大儀になってお止めになったのだらう位に思っていました。1月30日の朝の事、いつもと違う弱々しいお声の電話を頂きました。「昨年暮れに東京で手術。子供達や孫が皆東京なので、神戸に主人を残して今は東京の長男と同じマンションでの暮らし。必要な家具は全て神戸から運んでもらって、皆に至れり尽くせりにしてもらっている。貴女の『羊飼いと幼子』のお絵も持ってきてもらって、ベットの目の前に飾っていつも眺めている。その事をどうしてもお知らせしたくて今日漸く電話が引けたので一番に掛けている」と。ショックでした。こんな日が大好きな英子さんに訪れるとは・・・。とてもつらい気持ちでした。

「死して肉体は滅んだとしても、与えた愛は永遠に残る」と言われます。英子さんは、多くの人々に惜しみなく愛を与えて旅立って行かれました。日本のかけがえの無い宝が一つ消えてしまいました。寂しさは非常に大きいものですが、たくさん、たくさん交した会話の一つ一つが生き生きとよみがえってきます。そしてどうしてか近くに感じられて、親しく語りかけてみたりしている私なのです。

会からの報告 & お知らせ & お願い

12月9日、中野振一郎チャリティコンサートのおしらせ

チェンバロおよびハーブシコード演奏で日本ではトッププレイヤーで、世界でも屈指の中野振一郎さんをお招きして、チャリティコンサートをおこないます。テレビやラジオにもよく出演し、楽しいトークでも人気があります。

感動的なバロック音楽をかなでるチェンバロの、微妙な音の積み重ねがこころを揺さぶります。ぜひ足をお運びください。共演はヴァイオリンの西山昌子さん、パイプオルガンの飯靖子さんです。

演目はバロック巨匠のガルツピ、クーラン、スカルラッティ、ボアモルティエ、ヘンデル、バッハらがこころをくだいて作った名曲の数々。

12月9日(金)18時開場、19時開演で、港区赤坂の霊南坂教会で開催します。毎年おこなっている社団法人・海外と文化を交流する会主催の「チャリティコンサート」ですが、人気のバザールもひらきます。クリスマスもまぢか、プレゼントにいかがでしょうか。

チケットは当日4,500円、前売り4,000円です。お問い合わせは海外と文化を交流する会まで、e-mail(jimukyoku@kaigai-bunka.org)、またはTel&ファクス(03-3370-6786・田口・午後6~9時)でどうぞ。郵便振替「(社)海外と文化を交流する会00130-2-366249」にお名前・ご住所を明記くださればチケットをお届けします。ホームページ(www.)でもご案内しています。チケットの予約もできるようになりました。どうぞお友だちにでもお伝えください。

来春には「チェロとパイプオルガンの響き」

2006年4月28日にもコンサートを予定しています。人気急上昇のチェリスト水谷川優子さんと、パイプオルガニスト関本恵美子さんのたのしいコンサート。会場は東京・赤坂・霊南坂教会を予定しています。詳細は後日お知らせします。どうぞお楽しみに。

日本画プロジェクト

いまから30年ほどまえ、「社団法人・海外と文化を交流する会」は、奥村土牛・片岡球子・上村松篁・橋本明治ほか当代一流の25作品を、オーストラリアと親交を深められたら、という願いをこめて、寄贈しました。その後もニュージーランドに同様に16点を寄贈、海外と文化を交流する会の注目される活動のひとつです。

2006年、日豪交流年になります。そこで、かつて寄贈した現代日本画25点を記念展として開催することになりました。ふだんは保管してあるので、なかなか目に触れることはありません。本格的に決まり次第、ご報告します。豪州メルボルンへおいでのときに、

ご覧くだされば幸いです。

会費納入のお願い

2005年度の年会費納入をお願い申し上げます。2003年度 2004年度の年会費未納の方は、ぜひともご納入ください。高く評価されている当会の活動は、皆さまのご支援あってこそなのです。

郵便振替 00130-2-366249 社団法人海外と文化を交流する会
銀行振込 東京三菱銀行渋谷支店 (普) 2266599 海外と文化を交流する会
会費 10,000 円 (正会員) 5,000 円 (特別賛助会員) 3,000 円 (学生会員)

海外と文化を交流する会事務局

〒151-0053 東京都渋谷区代々木1-27-6 パイビル内

TEL&FAX 03-3370-7654 e-mail:jimukyoku@kaigai-bunka.org

<http://www.kaigai-bunka.org>

